

# 第1章 各学科に共通する各教科

## 第1節 国 語

### 第1 国語科の基本的事項

#### 1 改訂のねらい

##### (1) 改善の基本方針

言語の教育としての立場を一層重視し、国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるとともに、実生活で生きてはたらし、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること、我が国の言語文化を継承・発展させる態度を育てることに重点を置いて内容の改善を図った。

特に、言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することや、我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視した。

##### (2) 改善の具体的事項

ア 中学校までに培われた国語の能力を更に伸ばし、社会人として必要とされる国語の能力の基礎を身に付けることができるように、生徒の発達段階を踏まえた学習の系統性を重視し、学年段階ごとに、具体的に身に付けるべき能力の育成を目指し、重点的な指導が行われるようにする。

イ 生徒一人一人の能力・適性、興味・関心に応じた多様な学習が行われるようにする。

ウ 高等学校国語科の主な改訂の要点

##### (ア) 教科の目標の改善

言語の教育としての立場を重視し、社会人として生きるために必要とされる国語の能力の基礎を身に付けるという基本的な理念を継承した。したがって、小学校及び中学校との系統性を重視するため、想像力を伸ばすことについての記述を新たに加えているほかは、これまでと同様とした。

##### (イ) 科目構成の改善

従前の「国語表現Ⅰ」、「国語表現Ⅱ」、「国語総合」、「現代文」、「古典」及び「古典講読」の6科目から成る構成を、「国語総合」、「国語表現」、「現代文A」、「現代文B」、「古典A」及び「古典B」の6科目から成る構成に改めた。また、「国語総合」を共通必修科目とした。

##### (ウ) 各科目の目標及び内容構成の改善

教科の目標を全面的に受けるのは、「国語総合」である。一方、「国語表現」、「現代文A」、「現代文B」、「古典A」及び「古典B」は、教科の目標のそれぞれの部分を重点的に扱う科目であり、各科目の性格

に応じて目標を示している。また、各科目の内容は、科目の目標を確実にかつ豊かに実現できるようにしている。さらに、「国語総合」の内容については、「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」、「C 読むこと」の3領域と従前の〔言語事項〕を〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に改めた。

##### (エ) 言語活動の充実

各科目及び領域の内容の(1)に指導事項を示すとともに、これまで内容の取扱いに示していた言語活動例を内容の(2)に位置付け、再構成した。

##### (オ) 言語文化に関する指導の重視

共通必修科目「国語総合」に、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕を設けるとともに、我が国の伝統と文化、とりわけ言語文化に対する理解を深めることを主なねらいとする科目「現代文A」、「古典A」を設けた。

##### (カ) 学習の過程と系統性に配慮した内容の改善

中学校までの指導との円滑な接続を図り、高等学校において発展的に指導できるよう、学習の過程や系統性に配慮して内容の改善を図った。

##### (キ) 読書活動の充実

学校図書館や地域の図書館などと連携し、読書の幅を広げ、読書の習慣を養うなど、生涯にわたって読書に親しむ態度を育成することや、情報を使いこなす能力を育成することを重視して改善を図った。

### 2 国語科の目標及び科目等

#### (1) 国語科の目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

目標は、大きく二つの部分から構成している。

① 国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めること。

② 思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てること。

①は、言語の教育としての立場に立つ国語科の目標の柱として、従前から重視してきたものである。この中の、国語を適切に表現する能力と的確に理解する能力とを育成することは国語科の最も基本的な目標であ

る。これらの能力の育成を基盤として、伝え合う力を高めることを位置付けている。「伝え合う力」は前回の改訂から位置付けられ、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり的確に理解したりして、円滑に相互伝達、相互理解を進めていく能力のことである。言語の教育の立場に立つ国語科としては、「伝え合う力」を高めることを通して、一人一人が良好な人間関係づくりや健全な社会づくりに積極的にかかわろうとする意欲や態度の育成をしていこうとするものである。

②は、言語の教育としての立場を重視する観点から、高等学校国語科において育成を目指す能力や態度が示されている。今回の改訂では、「思考力や想像力を伸ばし」と「想像力」が加わった。「想像力」とは、物事を心に思い浮かべたり、推し量ったり、予測したりする能力である。また、想像力を伸ばすとは、将来の状況やあるべき姿を予測したり、見通しをもって行動したりすることの能力までを含めて身に付けることである。

教科の目標の中に示された能力や態度は、相互に有機的に関連し合うものであり、そうした関連に十分留意して、効果的な指導をすることが必要である。

## (2) 科目の編成

国語科の科目の編成は次のように改められた。

平成11年告示 学習指導要領		平成21年告示 学習指導要領
・国語総合(4)	→ 改善	・国語総合(4)
・国語表現Ⅰ(2)	→ 再構成	・国語表現(3)
・国語表現Ⅱ(2)	→ 新設	・現代文A(2)
・現代文(4)	→ 改善	・現代文B(4)
・古典講読(2)	→ 改善	・古典A(2)
・古典(4)	→ 改善	・古典B(4)
選択必修履修科目		共通必修履修科目
( ) 標準単位数		

「国語総合」が共通必修履修科目とされた。「国語表現Ⅰ」及び「国語表現Ⅱ」を再構成し「国語表現」とし、新たに「現代文A」が新設された。

「国語総合」を共通必修履修科目としたのは、中央教育審議会答申において「学習の基盤であり、広い意味での言語を活用する能力とも言うべき力を高める国語、数学、外国語については、現在選択必修となっているが、義務教育の成果を踏まえ、共通必修履修科目を置く必要がある。」と提言されたことによる。これにより、高等学校国語科において指導する内容の共通性を重視することとなった。

また「現代文A」、「現代文B」、「古典A」及び「古典B」に付されている「A」、「B」は科目の性格の違いを示している。「A」を付した科目は、言語文化の理解を中心的なねらいとし、「B」を付した科目は、読む能力を育成することを中心的なねらいとしている。

## (3) 科目の履修

### ア 履修の順序

履修順序は、原則として共通必修履修科目の「国語総合」を履修した後、選択科目を履修させるものとする。このことに留意して、選択科目相互の履修順序は、各学校の生徒の特性や実態等に応じた教育課程の編成や指導計画の作成が行われるようにする必要がある。

### イ 履修学年

「国語総合」については、共通必修履修科目であることや教科の目標を全面的に受け、内容構成も3領域1事項とするなど中学校との接続を重視し、高等学校における国語の基礎・基本を身に付けさせることをねらいとしている。そのため他の選択科目は「国語総合」を履修した後に履修するようにしていることなどに留意して、履修学年を設定する必要がある。

## 3 指導計画の作成

### (1) 基本的な考え方

教科の目標や各科目の目標、内容及び内容の取扱い並びに関連する総則の規定について十分理解を深め、生徒の「生きる力」としての国語の能力の育成を目指し、適切で効果的な指導ができるよう配慮する必要がある。なお、計画を立てる際には、まず、生徒に身に付けさせたい「言語能力」を考える。次に、言語能力にふさわしい「学習活動」を考える。そして、学習活動にふさわしい「教材」を考える、という手順を踏む。  
ア 「国語表現」、「現代文A」、「現代文B」、「古典A」及び「古典B」の選択科目については、原則として「国語総合」を履修した後に履修させるものとする。  
イ 選択科目は、「国語総合」の「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」、「C読むこと」と〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕との十分な関連を図る必要がある。

### (2) 指導計画作成上の配慮事項

指導計画は、教科・科目について、指導目標、指導内容、指導の順序、指導方法、使用教材、指導の時間配当などを定めた、より具体的な計画である。各学校においては、次に示す事項などに十分配慮し、地域や学校の実態、課程や学科の特色、生徒の特性などを考慮して、創意工夫を生かし、十分検討を行った上で、全体として調和のとれた具体的な指導計画を作成しなければならない。

#### ア 教材についての留意点

科目ごとの目標を実現し、内容を習得するために、教材については、各科目の内容の取扱いにおいてそれぞれ留意する必要がある。

イ 学校図書館の計画的な利用、読書推進、情報活用  
生徒の読書意欲を喚起し、読書する態度を育成するとともに、課題を解決するために必要な情報を検索、収集し、活用する能力を養成するために、学校図書館の計画的な利用とその機能の活用を図る必要がある。

ウ 教材・教具の適切な活用

音声言語や画像による教材、コンピュータや情報通信ネットワークなども適切に活用して、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むこと全般にわたって学習の効果を高めるようにする必要がある。

エ 道徳教育との関連（総則第1款の2）

国語科による表現と理解の能力を育成するとともに、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら言葉で伝え合う力を高めることは、道徳教育を学校の教育活動全体で進めていく上で、基盤となるものである。

オ 学校設定科目（総則第2款の4）

学校設定科目の名称、目標、内容、単位数等について定める際には、教科の目標に基づき、関係する各科目の内容との整合性を図ることに十分配慮する必要がある。

カ 共通必修科目の減単位（総則第3款の1の(1)）

特に必要がある場合には、「国語総合」については3単位又は2単位とすることができる。ただし、標準単位数を減じることを検討する場合も、「国語総合」の目標を実現できる範囲で行うこと、生徒の実態からみて、標準単位数を減じても目標の実現や内容の習得が可能であることが前提である。

キ 義務教育段階での学習内容の確実な定着（総則第5款の3の(3)）

今回の改訂では、高等学校段階の学習に円滑に移行できるよう、生徒や学校の実態等に応じて義務教育段階での学習内容の確実な定着を図ることを明確化した。

ク 言語活動の充実（総則第5款の5の(1)）

今回の改訂では、言語に関する能力の育成を重視し、各教科・科目等における言語活動を充実することとしている。国語科の指導においては、各教科・科目等における言語活動の充実に資するという視点を常にもち、国語科の各科目の指導と評価の計画の中に、他の教科・科目等の指導との関連を明確に位置付ける必要がある。

## 第2 各科目の概要

### 1 「国語総合」

#### (1) 目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

「国語総合」の目標は、小・中学校の目標を受け継いでいる教科の目標と同一である。これは、義務教育段階からの系統性を重視し、総合的な言語能力、すべての教科・科目の学習の基本となる国語の能力、社会人として生活するために必要な国語の能力の基礎を確実に身に付けさせることをねらいとした、共通必修科目として設定されたことによる。

#### (2) 指導計画作成上の配慮事項

##### ア 領域区分と領域相互の関連

「国語総合」の内容は、今回の改訂で、3領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に改められた。また、他の選択科目の内容が、その性格や特色に応じるために領域等別の構成ではないのに対して、「国語総合」の内容は、3領域1事項のすべてにわたっている。総合的な言語能力を養うためには、内容について相互に密接な関連を図りながら、効果的な指導を実践していく必要がある。そのため、多様な言語活動を、適切な指導と評価の計画の下に実践する工夫が求められる。「A話すこと・聞くこと」には15～25単位時間程度、「B書くこと」には30～40単位時間程度が配当され、残りの時間が「C読むこと」に配当される。〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕については、特に時間配当は示されず、中学校の指導の上に立って、他の3領域の指導の中で深めることとする。

また、「C読むこと」の中では、古典と近代以降の文章の割合は、おおむね同等とすることを目安として、生徒の実態に応じて適切に定めるものとする。なお、古文と漢文との割合は、一方に偏らないようにする必要がある。そして、音読、朗読、暗唱や、演じることなども含めて、幅広く音声言語による活動を指導に取り入れるよう配慮する。

##### イ 各領域の内容

今回の改訂では、内容(1)に指導事項、内容(2)に言語活動例が示されている。(1)に示す指導事項を、(2)に示す具体的な言語活動を通して指導するものである。義務教育からの系統性を踏まえて「計画・指導・評価」を整える中で、指導事項は全員について指導



し評価する目標となるが、言語活動は、すでに学習した事項として計画の中に位置付けられる。義務教育で指導事項として取り上げられていた内容との関連を押さえながら、もし不十分であると評価される部分があれば、それを身に付けられるよう指導する、という言語活動もあり得る。また、指導事項と言語活動例は、1対1対応をしているわけではない。例示されたもの以外にも、指導内容や生徒の実態にふさわしい言語活動を考えることが重要である。

#### ウ 読書指導

情報化が進展する社会において、進んで読書をする習慣を養うことの重要性は一層高まっている。興味・関心や必要に応じて選ぶ力を養い、読書生活をより豊かにするためにも、自分の読書生活を振り返ることは大切である。また、生徒の読書の幅を広げるには、関係機関や司書・司書教諭と連携した指導が必要である。

#### エ 教材の選定

教材の選定に当たっては、生徒の発達段階や国語の能力の程度、興味・関心などに充分配慮し、適切で価値あるものを精選して、バランスよく取り上げることが大切である。

また、「国語総合」は、教科の目標を全面的に受け、総合的な言語能力を育成することをねらいとした共通必修科目である。ここに留意し、3領域1事項のすべてにわたって、それぞれの能力や態度を偏りなく育成することや読書に親しむ態度を育成することをねらいとして、教材を選定する必要がある。そのため、9項目の配慮すべき具体的な観点が示されている。

#### (3) 指導上の留意点

指導事項及び言語活動例については、「小学校、中学校及び『国語総合』の目標及び内容の系統表」等を利用して、内容の関連を確認しておくことが大切である。

#### ア 「A話すこと・聞くこと」

##### (指導事項)

(ア) 話題について自分の考えを持つこと、論理の構成や展開を工夫すること

話題となる事柄について、調べた内容を整理し、自らの態度を自覚した上で、異なる立場に立って見つけ直し、自ら判断して自分の考えを形成するような学習活動が大切である。また、自分の意見の述べ方にかかわる学習活動では、確実な根拠や妥当な論理の展開によって導き出された考えを、相手にわかりやすく筋道立てて表現する工夫が大切である。

(イ) 効果的に話すこと、的確に聞くこと

「話すこと・聞くこと」は、話し手と聞き手との相互の関係により成り立つ。これを踏まえ、「目的や

場」に条件付けられた中で伝達が成立することに留意しながら、音声言語の学習を行う。また、効果には、内容がよく伝わるように資料や機器を使用すること、目的や場にふさわしい表現をすること、二つの側面があることに配慮する。

そして、的確に聞くためには、思考や判断に必要なことを、間違いなく、過不足なく聞き取るという積極的な態度が大切である。

(ウ) 工夫して話し合うこと

表現の仕方の工夫とは、論理的側面だけでなく、表情や視線、声の調子なども含めたものである。また、「進行の仕方」については、今回の改訂で義務教育の内容に明示されたことを踏まえ、指導の工夫をしていくことが大切である。

(エ) 表現について考察したり交流したりして、考えを深めること

自己評価や相互評価を行い、自分の話し方や言葉遣いに役立てることは、指導事項として明確になった。この内容は、「B書くこと」の指導事項のエとの関連も考えて指導する。

また、自己評価や相互評価を行うには、個々の生徒の実態に充分配慮した学習計画や、授業の中で生徒が互いを認め合う雰囲気づくりが大切である。他教科の教員との相互理解や共通認識が必要である。

##### (言語活動例)

(ア) スピーチや説明をする活動

説明に使う資料には、図表なども含まれる。話し手聞き手双方の交流の中で、条件や場に応じた臨機の学習活動が効果的に進むよう配慮することが大切である。

(イ) 報告や発表をしたり、それらを聞いたりする活動  
発表や報告のためには、調査したことなどをまとめることが前提となる。また、聞く側は、分類・整理・分析・考察された内容と、効果的な表現の双方を検討・吟味することが大切である。

(ウ) 話し合いや討論をする活動

課題にふさわしい場や形式の設定、内容にかかわる事前の準備が必要な場合もある。建設的な合意を図る話し合いや、ディベート形式の討論など、多様な活動の中から学習に適したものを選択する必要がある。

#### イ 「B書くこと」

##### (指導事項)

(ア) 題材を選び、表現を工夫して書くこと

文章の形態の選択に加え、文体、語句などの工夫が求められる。また、題材選びでは、材料を収集・選択する力を身に付けさせる指導にも配慮する。

(イ) 論理の構成や展開を工夫して書くこと

今回、初めて「論拠」の語が用いられた。自分の考えを、確実な根拠に支えられた、緻密で矛盾のない文章にするには、「序論—本論—結論」、「現状認識—問題提起—解決—結論—展望」という組立てや、頭括式、尾括式、双括式という文章の型などを身に付けさせることも有効である。また、この内容は、「A話すこと・聞くこと」の指導事項のエとの関連も考えて指導する。

(ウ) 適切な表現の仕方を考えて書くこと

読み手に間違いや過不足のない情報を伝える具体的・論理的な説明や、読み手が対象をありありと想像できるような描写を、目的や場にふさわしく使い分けていくよう指導することが大切である。

(エ) 表現について考察したり交流したりして、考えを深めること

「B書くこと」の指導の中でも、優れた文章に接してその条件を考えるには、「読む」という言語活動が不可欠であり、読書活動との関連も大切になる。

また、「A話すこと・聞くこと」の指導事項のエとの関連も考えて指導する必要がある。

(言語活動例)

(ア) 詩歌や随筆などを書く活動

(イ) 説明や意見などを書く活動

(ウ) 手紙や通知などを書く活動

義務教育からの継続を踏まえ、3つの例が示された。特に「B書くこと」においては、情報モラルや著作権についての指導も大切である。

ウ 「C読むこと」

ここで示される指導事項は、近代以降の文章ばかりでなく、古典にも該当する。教材も、古典に関連する近代以降の文章も取り上げるなどの、古典を読むことへの意欲を喚起する授業改善の工夫が必要である。

(指導事項)

(ア) 表現の特色に注意して読むこと

内容と表現の双方についての理解によって、より深い理解に到達できるよう指導することが大切である。

ここでいう文章の形態とは、文学的な文章（詩歌、小説、随筆、戯曲など）、論理的な文章（説明、論説、評論など）、実用的な文章（記録、報告、報道、手紙など）を指す。文章の内容や形態ごとに固有な表現の特色がある。文体や表現技法、使用される語句や、文の長短、書き手の工夫や書きぶりの違いなども、表現の特色として注意させるよう配慮する。

(イ) 文章を的確に読み取ること、要約や詳述をすること

今回、「要約」から「要約や詳述」へと改訂され、

双方向性が明示された。もちろん、要約や詳述は表現する能力を伸ばすことにも役立つが、「C読むこと」の指導として扱い、「B書くこと」の時間配当には含まない。

(ウ) 表現に即して読み味わうこと

「表現に即して」とは、恣意的な読み取りとならないようにすることであるが、表現に即して叙述を取り上げ、論理を組み立てて説明できる限り、様々な読みの可能性が存在することを認めなければならない。細部の分析に偏って文章全体の味わいを損なわないよう、また、詳細な説明に偏って生徒の主體的な読みを損なわないよう、配慮することが大切である。

(エ) 表現の仕方を評価すること、書き手の意図をとらえること

文章を的確に理解した上で、内容や表現の仕方の価値、優劣、是非について判じることが「評価」である。また、書き手の意図をとらえることについては、書き手の考えを読み取った上で、なぜこの文章を書いたのか、なぜこのように書いたのか、というところまで考えさせることが必要である。

(オ) 読書をして考えを深めること

幅広く読むということには、文章形態の幅の広さや、書かれた内容・分野の幅の広さのほか、図書館やウェブページなどで検索するように、本や文章を手に入れる方法や場についての幅の広さも含まれる。そして、情報を得て用いるためには、適切な情報源の選択、得た情報の評価、目的に応じた適切な加工といった過程があり、それら一つ一つにかかわる指導が必要である。

また、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにするためには、偏ることなく多くの種類の文章に接する機会をもたせ、適切な読書指導を行うことが必要である。

(言語活動例)

(ア) 脚本にしたり、書き換えたりする活動

「B書くこと」でも、書くために「読む」という言語活動が不可欠であったが、「C読むこと」の指導事項を身に付けさせるためには、「読む」という言語活動だけでは不十分である。表現する活動を通じて読みを深めること、翻案という言語活動を通じて我が国の言語文化への理解を深め、読書活動に生かすことが大切である。

(イ) 情報を読み取り、まとめて発表する活動

どのように表現されたものから何を読み取るか、課題に応じて必要な情報を判断することが重要である。読み取り、取舍選択してまとめる際には、情報の信頼性に注意したり、情報モラルや著作権に配慮

したりすることが大切である。また、情報科担当教員や司書・司書教諭などの連携が必要である。

(ウ) 実用的な文章を読んで話し合う活動

実用的な文章の内容を理解することは、社会において自立的に生き、様々な活動に参画する基礎となる。現代社会では、主体的な話し合いを通して社会と関わり合うことができる力を養うことが大切である。

(エ) 読み比べたことについて、感想を述べたり批評したりする活動

時代・形態を問わず、多種多様な文章を読み比べることは大切である。また、各自で読み比べるだけでなく、ペアやグループで交流することが、学習意欲を高め、考えを深めることにつながる。「A話すこと・聞くこと」や「B書くこと」と同様、交流することを指導の中で生かすものとする。

エ 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】  
(伝統的な言語文化に関する事項)

(ア) 伝統的な言語文化への興味・関心を広げること

主に古典を教材とした指導を通じて、我が国の伝統的な文化の独自性と価値について多様な方面から知り、これを尊重する態度を育成することは、国際化が進む現在、これまで以上に重要となっている。

また、古来我が国は中国から多くのものを学んだ。漢文を古典として学ぶ意義もそこにある。ヨーロッパの文化も、近代以降の影響はもとより、近世以前の南蛮渡来の文化の影響も存在する。これらを踏まえ、外国の文化との関係という面からも、我が国の文化を理解させることが重要である。

(イ) 文語のきまり・訓読のきまり

文語のきまり・訓読のきまりについては、詳細なことにまで及ぶことなく、実際に古文や漢文を読むことの指導に即して扱う。なお、従前の「程度とすること」という表現は削除された。

(言葉の特徴やきまりに関する事項)

(ア) 言葉の成り立ち、表現の特色、言語の役割など

言葉の成り立ちには、歴史的な成り立ちと変遷、語句・語彙の構造的な仕組みという二つの側面がある。

また、表現の特色は、文章の形態や文体、音韻、文字、表記、語句、語彙、文法など、国語の各側面から考えることができ、他の言語との比較でも理解できる。そして、言語の役割については、個人や社会の中で果たす役割や、文化の享受や発展とのかかわりを考える必要がある。そのため、生徒の身近な言語生活の経験を通して考え、理解を深め、実際の言語の運用に資するような学習活動を構成する必要がある。

(イ) 文や文章、語句、表記、語彙

義務教育を通して一貫して指導してきた知識や技能が確実に身に付くよう、また、未知の言葉に関心を持たせるよう、意識的に指導する必要がある。

(漢字に関する事項)

(ア) 常用漢字の読み書き

中学校における学習の上に立ち、常用漢字の音訓を正しく使えるようにするとともに、主な常用漢字が文脈に応じて書けるようになることが求められる。

## 2 「国語表現」

(1) 目標

国語で適切かつ効果的に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、言語感覚を磨き、進んで表現することによって国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる。

「国語表現」は、従前の「国語表現Ⅰ」及び「国語表現Ⅱ」の内容を再構成した選択科目である。

国語によって、適切かつ説得力のある表現や感動を与える表現を行う能力を育成すること、伝え合う力を高めることをねらいとしている。「思考力や想像力」とは、言語を手掛かりとしながら物事を筋道立てて考える能力や、物事を心に思い浮かべたり、推し量ったり、予測したりする能力である。それらの能力を伸ばし、表現の質を一段と高め、積極的に表現することによって、国語そのものや自らの言語の運用を省み、国語の向上を図る態度を育成するとともに、人生を豊かにし、人間相互の理解を深め、社会生活の充実を図る態度を育成することをねらいとしている。

(2) 指導計画作成上の配慮事項

ア 領域区分と領域間相互の関連

「国語表現」は、共通必修科目である「国語総合」の3領域1事項のうち、「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」と【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】とを中心として、その内容を発展させた科目である。

「国語総合」の表現に関する内容を発展させた科目であり、「A話すこと・聞くこと」及び「B書くこと」の能力を一層伸ばさせることをねらいとしているが、生徒の実態等に応じて、「A話すこと・聞くこと」又は「B書くこと」のいずれかに重点を置いて指導できる。ただし、いずれか一方のみの指導に終わることがないように留意する必要がある。

イ 教材

生徒の学習活動の指針となり、以下のような具体的な手掛かりを与え、主体的な学習活動を触発するものであることが必要である。

「思考力」を伸ばす教材としては、論理的な構成をもち、十分な説得力を備えているもの。論理的な



表現の仕方について分かりやすく、具体的に述べているものなど、表現活動を通して論理的な思考力を養うもの。「想像力」を伸ばす教材としては、物事の微妙なところまで描き出して心情を豊かにするもの。根拠に基づいて予測し、この先どうなるのかを考え、どうすべきなどを検討するのに役立つもの。

「情報を活用して表現する」教材としては、情報の収集、整理の方法を示し、正確かつ簡潔な資料の作成に参考となるもの。記録、報告などの内容的に理解できるよう話題、題材が論旨に沿って具体的に配置されているもの。

「歴史的、国際的視野から現代の国語を考える」教材としては、古典や国語の歴史との関わりの中で、また現代の国語と外国語とのかかわり、言語の違いにより、ものの見方、感じ方、考え方の違いなどについて理解し合うことに役立つもの。

### (3) 指導上の留意点

ア 話題や題材に応じた情報を基に考えをまとめ、深めること

話題や題材に応じて、どのような情報が必要であるかを見通し、その情報の入手方法についての知識をもっていることが必要である。収集した情報については、的確に理解してその要素などを明らかにし、情報の正誤、適否などを吟味した上で、必要なものを適切に選択し整理する。そして、自分の考えを適切な形にまとめたり、事実についての認識や事実に向き合う態度を自らの内部に形成させたりする。情報の収集は、書籍、文書などの印刷物、新聞、雑誌、テレビ、ラジオなどのマス・メディアあるいはインターネットなどを通じて行う。

イ 異なる考えを尊重し、課題解決のために話し合うこと

課題を解決するための話し合いでは、自らのものの見方、感じ方、考え方を単に主張するだけでなく、自分とは異なる考えを丁寧に聞き、それを尊重する活動を通して、合意を形成することが必要である。その際、なぜそうした論理の展開が可能なのか、その論理を支える根拠は適切であるかなどを不断に判断していく。

ウ 内容が効果的に伝わるように、論理の構成や描写の仕方などを工夫すること

自分の考えを主張する際には、その内容を確実な根拠に基づいた妥当な推論によって導き、またそれを明晰に示すことが求められる。例えば、最初に主張を述べ、二番目に根拠となる分かりやすい具体例を精選して挙げ、三番目に一つ一つの根拠についての確かつ簡潔に説明し、最後により分かりやすい裏付けを加えて相手を説得するなどという、抽象度を

徐々に低くするような論理の構成についての工夫が大切である。

エ 表現を工夫して、効果的に話したり書いたりすること

目的や場にふさわしい表現をするために、目的に応じた用語、相手に応じた待遇表現、場の状況や用いる機器に応じた話し方、及び話し言葉で伝えるか書き言葉で伝えるか、場に応じた言葉、文章の形式などの選択を適切に行うことが大切である。また、通信のための文章では、メディアの選択などもあり、メディアの多様性にも留意する。なお、発声や発音の仕方、話す速度、文章の形式などの工夫については、小・中学校及び「国語総合」で一貫して指導してきているが、その一層の定着を図る。その際、生徒の自由な発想や表現、創造の意欲を損うことがないよう留意する。

オ 表現について考察したり交流したりして、考えを深めること

文語文と口語文、韻文と散文などの文章の種類や類型、話し言葉での言語表現の種類及び比喩、反復などの修辭的観点からの言語表現など様々な表現に触れ、対象を分析的に読んだり聞いたりして、それぞれの表現が発揮している効果を検討する。また、書いた文章を相互評価する。これらの活動によって得た成果を、自らの書くことの活動や、書いたものを推敲する活動に生かす。

カ 言葉の成り立ち、表現の特色、言語の役割などについての理解を深めること

文や文章、語句、語彙などについては、小・中学校及び「国語総合」で一貫して指導してきているが、さらに理解を深めることが必要である。また、文語の表現法には、簡潔にして要を得た優れたものがあり、現代の口語の表現にまで継承されてきた表現法を、指導の中に取り入れることが大切である。ここでは、現代社会における多様な表現活動やコミュニケーション活動を踏まえて、言語生活の在り方や言語表現の役割について幅広く考えさせることが大切である。

### (4) 言語活動例に関する留意点

ア 発表や討論をする活動

相手の立場や状況などを把握して、自分の考えを分かりやすく伝えることができるよう工夫する必要がある。また、論点の明確さ、主張や論拠の妥当性、例示の適切さなどに注意しながら、相手の話を聞くことが大切である。相手意識を明確にし、話し手と聞き手双方の交流の中で学習が効果的に進むよう配慮する。

イ 詩歌や小説の創作、鑑賞したことを書く活動

詩歌や小説を創作する言語活動であり、小説や物語を詩歌に、詩歌を小説に、古文や漢文を現代の小説に書き直すことも含まれる。鑑賞の対象としては、音楽、美術、工芸など、幅広く芸術作品全般を取り上げることができ、対象を理解し味わったことを自らの表現で示すことも大切である。

#### ウ 調査したことを整理して、解説や論文にまとめる活動

解説や論文などにまとめる際には、収集した情報を多角的に分析、考察して必要なものを取捨選択し、資料として活用できるような形に整えることが必要である。その際、学校図書館や地域の図書館などで情報を収集したり、日々の報道やインターネットなどを活用したりすることも有効である。

#### エ 紹介、連絡、依頼などの表現をする活動

紹介には、推薦書、本の紹介、部活動の紹介など、連絡には、個人あての文書、掲示、ホームルーム便りなど、依頼には、対面や電話で直接話す場合、手紙や文書で伝える場合などがある。その際、箇条書きにする、図表を入れるなど、社会で実際に役立つよう様々な工夫をすることが大切である。

#### オ 図表や画像などを用いた資料を編集する活動

身の回りの事柄や、社会、自然などの中から、自分なりの課題意識をもって見付けた話題や題材について、図表や画像なども用いて視覚的に訴えるものに整理することにより、相手により分かりやすく伝わる。コンピュータを活用し、その作成や編集を行うことも効果的である。なお、図表や画像をつくることを目的とした言語活動とならないよう留意する必要がある。

### 3 「現代文A」

#### (1) 目標

近代以降の様々な文章を読むことによって、我が国の言語文化に対する理解を深め、生涯にわたって読書に親しみ、国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる。

文章を読むことの楽しさやおもしろさを経験することを通して、言語文化への理解を深め、生涯にわたって読書に親しむ態度を育てることを目標としている。文章を読んで、楽しさやおもしろさを感じることができるのは、文章を読むことで感動や問題意識が生まれるからに他ならない。文章に表れたものの見方、感じ方、考え方を読み取り、問題意識を深めることによって言語文化への理解を深め、読書への関心を高めるようにする。

学びは生涯にわたって深められていくものであり、その基盤となる文章の読み方や、ものの考え方を学ぶ

ことによって、国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てることが必要である。

#### (2) 指導計画作成上の配慮事項

##### ア 他の科目との関連

「国語総合」では、読むことの指導内容として、文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むことや、文章に描かれた人物、情景、描写に即して読み味わうことなどが示されている。これらの学習を踏まえて「現代文A」では、近代以降の様々な文章を読むことを通して、学習内容を発展させて行く必要がある。

##### イ 教材の選定

教材は近代以降の様々な文章を扱うようにする。内容、表現ともに言語文化としての価値が高く、現代の文化・思想に深く関わり、書き手のものの見方、感じ方、考え方が味わえるような文章が求められる。ただし、特定の時代の特定の文種に偏ることなく、近代以降の様々な種類の文章を選ぶことが必要である。特に、伝え合う力を高めるのに役立つもの、思考力や想像力を養うのに役立つもの、あるいは、科学的・論理的なものの見方や考え方を養い、視野を広げるのに役立つものなどを選ぶように配慮する必要がある。

なお、必要に応じて実用的な文章、翻訳の文章、近代以降の文語文、演劇や映画の作品なども用いることができる。

##### ウ 読書指導

文章を読むことの楽しさを味わい、主体的に読書をする態度を育てることが大切である。そのために、思い思いの感想や考えを交流することなどを通して、問題意識を深めることで読書への関心を高めるようにしたり、図書館を利用して資料の収集法を学ぶことで、自ら学ぶための方法を学習したりすることも必要である。読書を通して新しい世界を知ること、人間の生き方、科学的なものの見方、考え方を学ぶことを大切に読書指導が求められる。

#### (3) 指導上の留意点

##### ア ものの見方、感じ方、考え方を読み取ること

文章を読むことによって、多様なものの見方、感じ方、考え方を知り、それを基に思考を広げ深めることは、生徒にとって、自己の内面を深め社会との関わり方を学ぶ上でも、社会生活を充実させる上でも、大切な体験である。論理的な文章で大切なことは、筆者がどのような視点から物事をとらえ、どのような構成や展開をしているのかということを読み取ることである。それによって、読み手の視野が広がり、様々な考えや価値観の存在に気付くように指導することが必要である。また、生徒を取り巻く今



日の環境を考える時、文学体験を通して自己を見つける機会をもつことは、ますます大切なことである。人物や情景の描写を読み味わい、作品中の言葉に根拠をもって想像力を広げイメージ化させることが必要である。作品世界との出会いの経験は、内面の成長の糧となる。様々な文章を、丹念に読み、味わうことで、多角的な視点から物事をとらえ、人間、社会、自然への認識を深めていくことが大切である。

#### イ 表現を味わうこと、語句の理解を深めること

言葉は、文脈の中にあって初めて意味をもつものである。言葉を辞書で調べても、その言葉に感動することはないが、同じ言葉が文章の中に使われることによって感動を与えることがあるのは、言葉が文脈の中で生命を与えられ、息づいているからである。文章を読み取るときに大切にしたいことは、一つ一つの語句を丹念に読み、味わうことである。単に、言葉の知識としてだけでなく、文章の中で息づく言葉を味わうことが大切である。

#### ウ 言語文化の特質について理解すること

近代以降、我が国は古典や外国の文化を享受して、独自の言語文化を形成してきた。国際的な視野に立って、外国の文化との比較を行い、幅広く考察していくことが大切である。文章は、それが書かれた歴史的、社会的状況を反映して、語彙や文章技法、主題や思想などにおいて、その時代固有のものをもっている。そして、優れた文章ほど、時代の固有性を映して个性的であると同時に、時代を超える普遍性をもっている。そのような文章によって言語文化は形成されてきた。しかし、言語文化とは、一部の優れた文章のみがそれを形成してきたのではなく、一人一人がそれに関わり築いてきたものであり、これからもそのようにして築かれていくものである。思想、主題とともに、それと密接に結び付いている表現技法を読み味わい、自分自身の言語生活に生かしていくことが大切である。

#### エ 言語文化についての課題を探究し、理解を深めること

言語文化について、課題を設定し、それを探究することは、今まで身に付けてきた能力を基に総合的に活用する学習である。生徒自身の言語文化についての問題意識に基づいて、自ら課題を設定できるように指導する必要もある。例えば、次のようなものが課題として考えられる。

近代作家の表現や語句の使い方の特色、テーマの変遷、テーマと時代背景、外国文化や思想の影響、外来語（カタカナ語）の広がり、日本語の文法の特色、日本語の語順、日本語の主述関係、論理的文章と日本語

課題を探究するために、自分自身の言語体験をまとめたり、図書館を利用して資料を整理、分析したりして進めるよう指導する。

日本語を言語の面から考え、学ぶことは、自分自身をあらためて知る機会となるとともに、他者との関係を学ぶ機会となるものである。

#### (4) 言語活動例に関する留意点

##### ア 音読や朗読、説明をする活動

文章を黙読していた時には気付かなかったものが、音読することによって読み手に伝わってくるものもある。朗読は、文章をまず自己の内面でとらえ、次にそれを声によって他に伝えようとする点で、一つの表現活動といえることができる。特に文学的な文章において、朗読を指導の中に位置付けることも必要である。ただし、文章の理解がないままに、ただ音読だけをするとということがないように注意しなければならない。群読も音読や朗読の学習の一つとして取り上げることも可能である。群読は、一つの文章をグループで読み合い、話し合うという学習であり、文章を互いに理解し合うということが欠かせない学習である。

また、文章を読んで印象に残った内容や場면을説明する活動では、文章の表現を根拠とし、分かりやすく説明するように指導することが必要である。

##### イ 文章の内容や表現の特色を調べ、まとめる活動

文章の内容や表現の特色を調べ、発表したり論文にまとめたりする場合には、広い視点に立って、外国の文化との関係も視野に入れる必要がある。我が国の言語文化が外国からどのような影響を受けたのか、また一方、外国において我が国の言語文化がどのように受容されているのか、といった観点も必要である。

また、口頭で発表したり、論文にまとめたりすることは、主体的な学習態度の育成にとって大切である。

##### ウ 話し合ったり批評したりする活動

授業で学んだ内容を基盤にして、それらをさらに発展させていくために図書館を利用した学習を指導計画の中に位置付けることも必要である。同じ作者の作品を数多く読んだり、同じテーマについて、様々な立場や角度から述べた文章を読み比べたりすることは、読み手の視野を広げ、テーマや文章を相対化することにつながる。

また、読み比べて、分かったことや気付いたことを話し合ったり批評し合ったりする場合には、文章を主観的に味わうだけでなく、客観的、分析的に読み深める必要がある。

## 4 「現代文B」

### (1) 目標

近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで読書することによって、国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育てる。

「目標」の冒頭部で「文章を的確に理解し」とあり、読むことを中心とする科目であることを示しているが、次に「適切に表現する」と続いていることから「表現」も重視する科目である。文章を読み取り理解する能力を高めることと、自分の考えを適切に表現する能力を高めることが、相互の関連の中で進められていく必要がある。

文章を読む過程は、思考の過程でもある。文章を読みながら様々な思いが行き来する。初めは漠然としている思いが、徐々に一つの認識としてまとまっていくこともある。すなわち、思考と認識は言葉のもつ主要な機能の一つである。文章を読み、それを批評することを通して、思考力が高まり、人間、社会、自然への認識が深まるのである。

思考の過程は、文章の言葉を通して、読み手の中に読み手自身の言葉を生み出そうとする過程でもある。このことは、読みの学習の中に表現の学習の可能性が含まれているということを示している。文章を読む学習と表現の学習は、相互に関連付けられることによって、より効果的なものになるのである。

また、学習指導の最も大きな目標の一つは、自ら学んでいく能力と態度を養うことにある。読むことや表現する能力を高めることを通して、様々な思考や認識を生み、深めていくことで、主体的に読書をし、学んでいく態度を育てることが大切である。

### (2) 指導計画作成上の配慮事項

#### ア 他の科目との関連

「国語総合」では、「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」、「C読むこと」の能力を、互いに密接に関連させて、効果的に指導することをねらいとしている。「現代文B」でもこれらの能力を相互に関連付けながら、体系的に指導を進め、深化、発展させていく必要がある。

#### イ 教材の選定

近代以降、様々な社会変動を経ながら、それぞれの社会状況を背景に多くの優れた文章が書かれてきた。優れた文章は、その社会の個別の状況を超えて現代の文化や思想に深く関わってくる。教材には、このような言語文化として価値が高く、思考や認識を深めるようなものが求められる。

ただし、「現代文A」と同様に、特定の時代の特定

の文種に偏らないようにし、実用的な文章も含めるようにする。また、必要に応じて翻訳の文章や近代以降の文語文なども用いることができる。

### (3) 指導上の留意点

#### ア 構成、展開、要旨及び論理性を評価すること

論説文や評論文のような論理的な文章では、文と文との関係や段落相互の関係を読み取ったり、全体の構成や論の展開あるいは要旨を読み取ったりして、文章全体の論理性を考察し、評価することが大切である。

また、文章の論理性を読み取る時に、言葉と対象がどのように対応しているのかを考えながら読む必要がある。筆者がどのような視点から対象をとらえ、それを言葉としてどう表現しているのかということ、つまり、言葉と対象の対応関係を読み取ることは、文章の論理性を読み取る上で欠かせない読み方である。

論理性を評価するということは、文脈の中で用いられている一語一語の言葉の意味と、それらの言葉が指し示している物事や事柄との対応関係や、言葉と言葉との関係の仕方とその妥当性を読み取ることである。

このことは、論理的な文章に限らず文学的な文章においても言えることである。文学的な文章でも、文章の構成や筋の展開などを読み取り、評価することを通して、文章に表れた思想や主題を考え、自己の内面を深めていくことは大切なことである。様々な文章を読むことで、多様な考えや価値観に触れ、ものの見方を広げ、思考や認識の能力を高めるように指導する必要がある。

#### イ 書き手の意図、描写をとらえ、表現を味わうこと

文学的な文章では、場面の展開に沿って、登場人物の行動や心情の変化などを読み取るとともに、登場人物相互の関係や、心情、情景の描写を読み取るように指導する。文章の言葉に沿って想像力を広げて読むことによって、自己を見つめ、自分の考えを深める機会となるようにする。また、文章の構成を読み取るように指導することも大切である。語り手の視点や筋の展開、あるいは、クライマックスなどといった作品の構成を把握することで、文章が豊かに読み取れるからである。優れた表現は、筋の展開から切り離されて単独で存在しているわけではなく、登場人物の心情や文章の構成を的確に読み取ることによって味わうことができる。

論理的な文章や実用的な文章では、書き手の意図を的確にとらえることが必要である。文章の構成や展開を読み取り、筆者が主張したり、説明したりしている要旨を的確にとらえ、表現方法・技法・文体

などを内容とともに読み取り、味わうことも大切である。

#### ウ 文章を批評し、考えを深めること

文章を読むということは、文章の言葉と向き合うことである。文章の言葉が、読み手の思考に働きかけ、読み手自身の言葉を生み出そうとするのである。文章を読んでそれについて批評するということは、読み手が文章と向き合っ、文章の特色や価値などを論じたり評価したりすることによって、人間、社会、自然などについて、自らの認識を深めようとするのである。文章を読む時には、文章から一方的に知識や情報を受け取るだけでなく、知識や情報への評価や批評が行われる。それによって、人間観、社会観、自然観が深まるのである。

また、そのように文章を読む能力を身に付けることは、自分の考えを表現する能力を高めることとつながっていくのである。

#### エ 情報を収集・分析し、表現すること

インターネットなどを通じて情報を容易に取得できる現代社会においては、目的や課題に応じて、収集した情報を分析、整理し、公正、適切に判断し、活用する能力が求められる。必要な情報とそうでない情報を判別したり、情報そのものの真偽や価値を判断したりする能力を高めることが大切である。そのような能力は、文章を的確に理解したり、適切に表現する能力と一体のものである。文章を読んだり、表現したりする学習を通して思考力を高め、人間、社会、自然への認識を深める中で養われていくものである。

情報を活用し表現する場合には、自分の考えがよく伝わるように、論拠を明示するなどして、分かりやすく、効果的に表現するように指導する必要がある。

#### オ 語句、語彙と文章を推敲すること

語句の意味、用法を理解し、語彙を豊かにすることは、文章を的確に読み取ることにつながるだけでなく、話したり、聞いたり、あるいは書いたりという豊かな表現につながる。

また、文章は様々な修辞法を用いて書かれる。文体はそのように書かれた表現上の特徴のことであるが、単なる表現技術上の特徴というだけでなく、修辞などの文章表現が、筆者の問題意識と結び付いたものであることに留意する必要がある。したがって、修辞や文体をとらえようとする時には、それらが、その文章の基にある問題意識と密接に関わったものとしてとらえる必要がある。

語句、語彙、修辞を学ぶことは、単にそれらを言葉の知識として学ぶことだけにとどまらず、文章を

読むことの中で、その文章の問題意識と関わったものとして学んでいくことも必要である。このことを踏まえて、自分の表現や推敲に役立てるようにすることが大切である。

#### (4) 言語活動例に関する留意点

ア 人物の生き方や表現の仕方について話し合う活動  
文学的な文章を読むに当たっては、まず、一人でじっくりと読み取り、作品世界に向き合うことが大切である。自分自身の今までの体験、知識、考え方を作品世界に重ねていく中で、自分にとっての既知の事柄が揺さぶられ、言葉を通して、未知の事柄を体験することがある。

この文学体験は、それぞれの読み手にとって同じものではないし、読み取りの深淺の違いもある。登場人物の生き方や心情、あるいは描写に対する理解の仕方は読み手によって異なるところは多い。自分の読みを他の生徒の読みと、話し合いなどによって交流させることで読みは深化し、文学体験はより明瞭な形を取り、その体験を自己の言葉としてとらえ直すことができるのである。

また、読みの交流は、自分の読みを深めるだけでなく、自分とは異なる読み取り方、感じ方、考え方を知ることによって、自己の内面を深める機会となる。

#### イ 書き手の考えや、展開の仕方について意見を書く活動

論理的な文章では、筆者がどのように対象をとらえ、どのような問題意識を持って書いているのかをとらえることが必要である。筆者の対象のとらえ方や問題意識や、主張の論拠として取り上げている事柄を通して読み取ることが大切である。

また、筆者が論拠として挙げている事柄は、現実の社会や生活の中のどのような事実を切り取ったものなのかを考えてみることも必要である。事実と意見とを読み分けながら、筆者の問題意識を的確にとらえられるようにし、自分自身の問題意識と関わらせながら読むことが大切である。また、一方で、読むことの学習と関連付けながら意見を書く学習を進めていく必要がある。

また、相反する立場で書かれた文章を読み比べることによって、論拠の取り上げ方もまた異なるということを学ぶことができる。

意見を書く文章として、序論—本論—結論などの構成、演繹と帰納、抽象と具象などの論理の展開、根拠を明示して考えを書くということ、あるいは、事実と意見とを考えながら書くということなどを指導することが必要である。

#### ウ メディアの特色をとらえ表現の仕方を考える活動



現代社会では、情報を伝えるために文字、音声、画像などの様々なメディアが用いられている。これらのメディアの特色をとらえ、目的や場面に応じて適切な表現の仕方を考えることが必要である。

また、これらのメディアの特色を生かし、新聞や雑誌作り、朗読劇、あるいはビデオ制作といった創作的活動も考えられる。しかし、様々なメディアは、それを使いこなす上での技能が必要とされるため、技術面が優先されないように留意する必要がある。

#### エ 課題を探究し、成果を発表・編集する活動

それまでの学習経験や身に付けた能力を基に、文章を読んで関心をもった事柄などについて、自ら課題を設定する。このことは主体的に学習に取り組み、人生を豊かにする態度を育てることにつながる。資料を調べるに当たっては、学校図書館、地域の図書館、インターネットなどの他に、現地への取材やインタビューといった方法も考えられる。資料の整理、分析や報告文や論文へのまとめ方はそれまでの学習経験を踏まえて進めるようにする。

## 5 「古典A」

### (1) 目標

古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。

「古典A」は、古典としての古文と漢文に加え、古典に関連する文章を取り上げることとし、教材の幅を広げている。これは、古典に親しむための指導を一層推進するためである。古典を読む能力の育成だけでなく、我が国の伝統と文化の特質などについて理解を深め、古典を通して、人々の様々な考え方や感じ方を知り、人生を豊かにしていくことのできる人間の育成を目指している。

### (2) 指導計画作成上の配慮事項

#### ア 他の科目との関連

「古典A」はこれまでの「古典講読」の内容を改善し、「現代文A」と対をなす科目として置かれた選択科目である。「国語総合」の3領域1事項のうち、「C読むこと」の古典の分野と〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕とを中心として、その内容を発展させている。小学校、中学校及び「国語総合」の指導との一貫性を図りながら、古典への興味・関心を広げることができるよう、指導法や学習形態等を工夫することが大切である。

#### イ 古文及び漢文の取扱い

古文と漢文の両方又はいずれか一方を取り上げることができる。これは、生徒の実態や興味・関心な

どに応じて内容の取扱いに幅をもたせ、指導上の様々な工夫ができるよう配慮したものである。

#### ウ 教材の選定

「古典A」で取り扱う教材は、古典としての古文と漢文、古典に関連する文章である。その中から特定の文章や作品、文種や形態などについて、分量的にも内容的にも、まとまりのあるものを中心として適切に取り上げるようにする必要がある。ただし、一文章や作品の全文を取り上げるということではなく、一文種や形態のすべての作品を網羅していかなければならないということでもない。古典に対する関心を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成できる教材を選定することが大切である。

また、「教材には、古典に関連する近代以降の文章を含めること。また、必要に応じて日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができること」とあり、教材は、古典への興味・関心を広げ、親しみやすく効果的なものを用いるようにする。

### (3) 指導上の留意点

#### ア 思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること

生徒が古典を通して、書き手や文章中の人物のものの見方、感じ方、考え方を知り、我が国の文化の特質を理解できるよう、また、古人の思想や感情を理解することを通して現代人のものの見方、感じ方、考え方を見つめ直すことができるよう指導する。同時に生徒が自らの生活や人生に目を向け、その在り方を深く考える態度を育成することが大切である。

#### イ 古典特有の表現を味わうこと、現代の言葉とのつながりを理解すること

文章の内容だけでなく、古典特有の表現を理解し、古典の表現の美しさ、深さ、面白さに触れることが大切である。その際、古典に親しむことを重視し、様々な言語活動を通して指導する必要がある。

また、古典の言葉と現代の言葉には時間的な連続性があり、時代を超えた一続きの言語文化ととらえることも重要である。なお、生涯学習の観点からも、辞書や参考資料などの利用に慣れさせ、学習の効果を高めるようにする必要がある。

#### ウ 言語文化の特質、我が国の文化と中国の文化との関係について理解すること

古典を読み、それぞれの時代や社会の姿、その中で言語文化を生み出した人々のものの見方、考え方、感じ方に触れることを通して、生徒が言語文化の特質を理解することが求められる。また、中国の文化については、我々の先人は中国からの文物を受け入れただけでなく、そこから我が国独自の文化を育て上げてきたことを理解することが必要である。

エ 伝統的な言語文化についての課題を探究し、理解を深めること

課題の設定に当たっては、様々な事柄に対する古人のものの見方、感じ方、考え方について、現代の人々との違いや中国の人々との違いなどを、時間的、空間的な比較を通して考えさせることができ、伝統的な言語文化の特色が明確になるようなものとする。

また、課題の探究に当たっては、伝統的な言語文化を通して、幅広く伝統と文化へ視野を広げる必要がある。

(4) 言語活動例に関する留意点

ア 音読、朗読、暗唱をする活動

古典は、現代の文章とは異なるリズムや響き、表現の美しさ、深さ、面白さに満ちている。こうした古典の魅力に気付かせ、古典への興味・関心を広げ、主体的な学習参加を促すことが大切である。また、音読、朗読、暗唱をすることは、文章の理解を助けたり、生徒同士で文章の内容や表現についての理解の有り様を確認し合ったりする上でも効果的である。

イ 表現について調べたことを報告する活動

故事成語、ことわざ、漢字の訓読み、旧暦や節句、年中行事にかかわる言葉、歌碑や句碑に刻まれた言葉、地域に残る伝説や民話、旧国名や地名など、我が国の伝統と文化に関連する表現を集め、調べることで、伝統と文化を身近なものとしてとらえることができるようにする。調べたことを報告する際には、調べたことの内容だけでなく、表現の魅力や調べることの意義についても盛り込むことが大切である。

ウ 読み比べたことについて、文章にまとめたり話し合ったりする活動

図書館を利用し、読み比べるための文章を探し、同時代の文章、同一テーマや素材の文章、また古典とそれを翻案した近代以降の文章などを読み比べる。さらに生活や人生などについて感じたり考えたりしたことを文章にまとめたり、話し合ったりする。そうすることで古典との対話を促し、生徒同士の交流を深め、古典の学習を生徒にとって価値あるものにしていくことが大切である。

## 6 「古典B」

(1) 目標

古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。

ものの見方、感じ方、考え方を広くすること、古典に親しんで人生を豊かにする態度を育成すること、古典についての専門的な学習を行うことなどの基盤であ

る古典を読む能力を養うことを中心的なねらいとしている。また、古典に表れたものの見方、感じ方、考え方を的確に読み取ることを通して、思考力や想像力を伸ばし、豊かな感性や情緒をはぐくむことで人間としての資質の形成に資することをねらいとしている。古典への関心を一層深め、自己の内面を見つめ、人生をより豊かにしていこうとする態度を育成することが大切である。

(2) 指導計画作成上の配慮事項

ア 他の科目との関連

「古典B」は共通必修科目である「国語総合」の3領域1事項のうち、「C読むこと」の古典分野と〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕とを中心としてその内容を発展させた選択科目である。「国語総合」における古典の指導が総合的な言語能力を育成する指導の一環として行われ、「古典A」における指導がまとまりのあるものを中心として行われているのに対して、「古典B」はある程度幅広く古典を取り上げ、かつ言語文化の変遷について理解を深めることとしている。小学校、中学校及び「国語総合」と一貫して伝統的な言語文化について指導し、古典を学ぶ意義を認識させ、古典に親しむ態度を育成してきていることを受け、一層古典についての理解や関心を深めることが大切である。

イ 古文及び漢文の取扱い

古文及び漢文の取扱いについては、両方を取り上げるものとし、いずれか一方に偏らないようにする。古文と漢文のいずれか一方に多くの時間をかけたり、取扱いに深淺が生じたりすることがないよう配慮し、全体として両者をバランスよく指導する必要がある。

ウ 教材の選定

教材は、読むことの学習と関連して言語文化の変遷についての理解を深めることができるよう、文章の種類や類型、形態に偏りなく、幅広い範囲で教材を取り上げ、古典の多様な世界に触れさせるようにする。長短難易様々なものをバランスよく取り上げ、その配列を工夫するなどの配慮が必要である。また、教材に日本漢文を必ず含めることとする。さらに、作品の価値について考察すること、言語文化の変遷について理解を深めること、古典についての興味・関心を広げることなどに資するために「古典についての評論文」を用いることができる。

エ 音読、朗読、暗唱

活動そのものが目的となることがないよう、古典を読み深めるためということに留意する必要がある。

オ 文語文法の指導

文語文法の指導は、文章の読みを確かなものに行ったり、深く読み味わったりするために行うものであ

る。また、生徒の実態に応じて学習の必要性の有無を適切に判断するとともに、文語文法の暗記に偏るなど、興味・関心を広げることを軽視した指導に陥らないよう配慮と工夫をする必要がある。漢文の訓読の指導に際しても、文語文法との関連に注意させる必要がある。

### (3) 指導上の留意点

#### ア 語句の意味、用法及び文の構造を理解すること

現代語訳や辞書などを適切に活用したり、現代の言葉と比較対照したりするなどの指導が必要である。文脈に即して意味や用法を習得させる指導や、書き手の意図や人物の心情などを、語句を手がかりに読み取り、作品理解につなげていく指導を工夫する。専門的な知識にわたることは避け、読むことの学習に即して指導し、生徒の興味・関心を広げるようにすることが大切である。

#### イ 内容を的確にとらえること

古典の内容を間違いなく把握するためには文脈や段落相互の関係を踏まえ、文章の構成や展開を正しく読み取る必要がある。その際、内容や要旨を観念的にとらえたり、部分にこだわり読みを狭めたりすることがないように留意する。古典を読むに当たっては、語句の意味の理解や文の解釈だけでなく、内容の理解の上に立って、次の「ウ」以下の指導事項を重視した学習活動を展開することが、大切である。

#### ウ 思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること

古典に表れた人間観、社会観、自然観等を的確にとらえ、生徒の思考力や想像力、判断力を伸ばし、心情を豊かにして、人間形成に資することが大切である。

#### エ 古典を読み味わい、作品の価値について考察すること

文章の修辞、文体など作品の表現の仕方の特色をとらえ、思想や感情などがどのように表現されているかを理解し、巧みな描写、繊細な表現、簡潔な語調などを味わうようにする。また、古典についての

評論文などを活用して、古典の普遍的な価値や、その作品が古典として現代まで読み継がれてきた意味について考えることも大切である。

#### オ 我が国の文化の特質、我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深めること

古典を読み、言語文化という範疇にとどまらず、より広い視野で日本文化について考える必要がある。また、中国文化との関係について考えることを通して、日本の伝統と文化を理解することが大切である。

### (4) 言語活動例に関する留意点

#### ア 言葉の変遷について調べて分かったことを報告する活動

辞書などを用いて言葉の変遷の過程について調べることは、国語についての認識を深めることにつながる。その際、古語辞典、漢和辞典、その他の関連資料を適宜用いることに留意する。また、分かったことを報告するという表現活動を行うことで学習への成就感を味わわせ、学ぶ意欲を高めるようにする。

#### イ 読み比べたことについて説明する活動

生徒が文章を課題意識をもって主体的に読むことができるように読み比べをする。分かったことや考えたことをまとめ、説明させることで、一層文章の理解を深めることにつながるようにする。

#### ウ 古典に表れた人間の生き方や考え方について話し合う活動

古典を読む際に現代の視点も含めて話し合ったり、中国の思想の日本への影響を話し合ったりしながら古典に表れた思想や感情を具体的に考える契機となるようにする。その際、文章中の表現を根拠にし、読むことと話し合うことが乖離することを避けるようにする。

#### エ 課題を探究し、成果を発表したり文章にまとめた活動

課題を自ら設定・探究し、成果を発表したり、文章にまとめた活動を行うことで、主体的に学習に取り組む態度を育成する。学校図書館等との連携を図り、活用させることも必要である。